# しあわせの魔法使い

ばしー

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

# あらすじ

魔法界に、幸せの風が吹くーそれは、闇の魔法使いにも普通の魔法使いも幸せになれる風。

この物語は、絶対的な幸せのため、一人の少女がハリー・ポッターの世界を駆ける物語。

※メタ多め・駄文です。

それでも
「ふん、あんたが見ろって言うなら見るわよ……感謝しなさいよこのクソ提督♪」な人だけどうぞ。

批評してくださる場合はやさしめの言葉使いでお願いしますなんでもしますから！
作者初投稿ですしおすし

# 目　次

奇跡と幸運の魔法使い ―――― 1

# 奇跡と幸運の魔法使い

プリベット通り7番地、ごく普通の一家屋、その家の窓から光が漏れ出している。

ここにはアルフォンシーノ・ホープ、名前が長いのでシーノ、と呼ばれている少し変わった少女が住んでいる。

変わっている点は、力を入れることなく物体を移動させたり、火を何も使わずに起こしたりなど、特殊な能力が使えること。

それと……絶対的な幸運。

ロトくじは3回連続で1等をひき、

テストを受けると勘だけで毎回満点を取る。

さらに彼女がするニホンで流行りのゲームでも、ラストトリプルダイソンというクリーチャーを一撃で突破したり、と規格外な幸運を持っている。

だが、問題点として、彼女は女性としては難ありという点がある。

「さすがしぐしぐー！ナイスカット！」

深夜までゲームをしていたり、女性しか愛せなかったり、自分より年下が大好き、そのうえ画面内の人物が大好き。

ニホンではこういう人達を『キモ＝オ・タ』、というらしい。

閑話休題。

「ふう……デイリー終わり終わりっと。」

シーノがパソコンのマウスから手を話したその時、訪客を表す鐘の音が響いた。

「誰だろう……？というか、深夜に来客なんて人としてどうなんだろう？」

文句をいいながらもしぶしぶ玄関の戸を開けると、そこにはメガネをかけた少年と、山ほどの大きさと見受けられる大男がいた。

メガネをかけた方の少年はシーノにも見覚えがある、少年。４番地のハリーだ。

「ハリーどったの?というか、そのビックな男はハリーの彼氏?」

「ど　う　し　た　ら　そ　う　み　え　る　ん　だ」

「ブラックジョークだよハリー、ジョークジョーク」

シーノの軽い会話のジョブが入ったところで、ハリーが話し始める。

ハリーは横にいる大男を紹介し始めた。

「こちらはハグリット、魔法学校の森の番人だよ」

「ちょっとなに言っているか分かりませんね新手の宗教団体ですか？」

あぁ、ハリーはこの人に洗脳されてしまったのか……あるいは快楽堕ちしたのか……

シーノがハグリットと呼ばれる大男について考察していると

「シーノ、絶対魔法について信じておらんな……ちょっと見ておれ。」

と話した後、ピンク色の傘を取りだし、傘を降った。

すると、傘先から水がドバッと溢れ出した。

シーノは一瞬びっくりし硬直した、が、次の時には目をキラキラとさせていた。

「すげー！魔法って本当にあったんだー！ただのカカシかと思っていたよ！」

「ただのカカシは言い過ぎだ」

ハグリッドは傘を仕舞うと、ひとつの紙を取り出した。

「ほれ、ホグワーツからの手紙だ、呼んでみな。」

『親愛なるホープ殿

この度ホグワーツ魔法魔術学校に入学を許可されましたこと、心よりお喜び申し上げます。教科書並びに必要な教材のリストを同封いたします。

新学期は9月1日に始まります。7月31日必着でふくろう便にてのお返事をお待ちしております。

敬具

副校長ミネルバ・マグゴナガル』

シーノはほえーという声とともに2枚目を取り出す。

そこには必要な物一覧があり、チケットが同封されていた。

「さて、キチンと渡したぞ。今日は夜遅いから明日、また迎えにきて、必需品の購入にいくからな。ハリー、今日は家に泊めてもらえないだろうか?」

シーノはそもそもハグリッドが寝れるようなベットがあるのか、という素朴な疑問に囚われるが
「別にいいですよ?」
と、ハリーは二つ返事で了承し、シーノに暇乞いをした。
「じゃね、シーノ。」
「また明日くるからのー!」
そういうとハグリットとハリーはシーノの家の戸口から去っていった。
「さて、と」
シーノは息を吐き、空を見上げた。
「自分が、魔法使い……ね」

アニメやゲームの世界でしかあり得なかった存在、それが自分であるという時点で、夢を見ているのかという錯覚にもとられる。

「……とりあえず、任務だけ処理して寝よっと。」

シーノの幸運さと能天気さ、それが数年後に魔法界を動かすとは……この時は誰も思っていなかった。